

文学・哲学・言語

keyword

- 言語学
- 文法記述
- 社会言語学
- 言語類型論
- パプアニューギニア



野瀬 昌彦
Masahiko Nose

経済学部
准教授

【プロフィール】

- ・1994年 東北大学 文学部 卒業
- ・1996年 関西外国語大学大学院 外国語学研究科 博士前期課程 修了
- ・2003年 東北大学大学院 文学研究科 博士後期課程 修了, 博士(文学)
- ・2005年 日本学術振興会 特別研究員 PD
- ・2005年 マックスプランク進化人類学研究所 客員研究員
- ・2008年 麗澤大学外国語学部 助教
- ・2012年 滋賀大学経済学部 准教授

【主な社会的活動】

- 所属学会
- ・日本言語学会
- ・社会言語科学会
- ・Association for Linguistic Typology

【代表的な研究テーマ】

- **パプアニューギニアの言語の文法記述と社会言語学的研究**
- **時間表現及びテンス・アスペクトに関する対照研究**

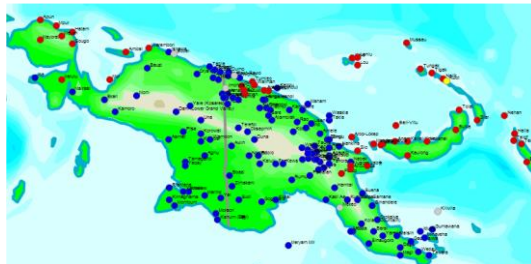
課題解決に役立つシーズの説明

パプアニューギニアで今も伝統的なライフスタイルを維持する村での調査を通し、言語や文化を学びながら、村落開発の補助を行うと共に、調査で得られた成果を自身の研究や教育に還元しています。

【1】パプアニューギニアの言語の文法記述と社会言語学的研究

日本の南の太平洋赤道直下に位置するニューギニア島は、その周辺合わせて 1000 語近くもの現地語が話される、言語的な多様性に富む地域である(下図左参照)。ニューギニア島の東半分がパプアニューギニアであり、ニューギニア島東部北岸部のマダン州で話される言語、特にアメレ語(Amele)とベル語(Bel)が研究対象である(下図左の黒枠部分)。両言語とも、さまざまな言語接触や歴史的变化を通して、従来の文法記述とは異なる文法的振る舞いが観察される。2006 年以降、現地でのフィールドワークを実施しており、文法記述及び社会言語学的調査が進行中である(下図右参照)。

ニューギニア島で話される言語は 3 万年から 5 万年前に移住してきた人類の「パプア系・ニューギニア系」と呼ばれる言語と 5 千年前から 7 千年前に船でたどり着いた「オーストロネシア系」言語、さらに多数の言語を介在する共通言語であるトクピシンが存在する。パプアニューギニアの現地語が話される地域では、なおも電気やガス、水道が存在しない状況で、住民は伝統的なスタイルと携帯電話や四輪駆動自動車等の現代的な事物とが混在した環境で生活している。特に、社会言語学的な立場からの調査を実施し、二言語併用、使い分け、及び家族・部族間での呼称に着目し現地調査を実施している。



【2】時間表現及びテンス・アスペクトに関する対照研究

パプアニューギニアのマダン州で話される複数の現地語において、テンス・アスペクト形式が動詞屈折にどの程度関与しているか、形態論的複雑性の点から分析する。テンス・アスペクト・ムードが一体化しているオーストロネシア系言語、アスペクト表現が語彙的もしくは文法化の途上にあるニューギニア系言語、そして単純な文法形式を持つレオール言語を対照する。

例えば、Amele 語では、時制が「今日の過去」、「昨日の過去」、「それ以前の離れた過去」のように多様な時制形を持つ一方、アスペクト形は副詞 wele「すでに」を付加することで語彙的に実現されている。

Ao, dana caub age na sab wele jiga.

Yes, man white he of food already eat-today's past

"Yes, I have eaten white man's food." (Amele: Roberts 1987:234)

オーストロネシア系言語は通常、テンス、アスペクト、ムードが一体となった動詞構造を有する。しかし、Manam 語では、テンスは必須ではなく、完了を表す接尾辞-doi が動詞に付加されている。

u-moana?o-dói.

1singular-eat-completive suffix

"I have eaten/ I have finished eating" (Manam: Lichtenberk 1983: 202)

企業・自治体へのメッセージ

パプアニューギニア、バヌアツの南太平洋地域、東欧・北欧地域(主としてハンガリーとフィンランド)、および中国や台湾での言語、文化交流などで協力できます。